

第9章 出会い

虹が出ると みんな教えたがるよ

石垣りん

黒柳徹子さん

黒柳徹子さんほど、おもしろい人はいない。

「あたくしの母は、もう亡くなつてしまったのですが、一度も夢になんか出て来ないんですよ」。

「死ぬ前に食べたいものがあるって申しまして、ご飯がわりに、おやつのスナック菓子を食べたいって言い出して、あたくしが、それならそれでいいんじゃないのと言ったら、ポテトチップスとかポップコーンとか食べていました。あれってパリパリ、ほそほそしますでしょ。甥っ子なんか夢中で食べている」。死ぬ前に食べたいものがあるのだろうか。私は何にしようかな。

「あたくしは、五千円札を集める趣味があります。でも、全然集まらなくて。すぐ、両替したり、

コンビニで使ってしまうから。外国でも女性の顔がお札になっているのは珍しいんでございますよ。それが、日本で初めて樋口一葉さんが発売されて、嬉しかったものですから集めるようにしているんです」。

NHKテレビ『音楽の広場』の思い出

芥川也寸志さんは、NHKテレビの音楽番組『音楽の広場』で、七年に渡って黒柳徹子さんと組んで司会を担当した。記憶が定かでないのですが、二つ覚えていることがあります。

一つ目は、芥川也寸志さんがニコニコして黒柳徹子さんに言いました。「今日は黒柳さんに会っていたきたい人があります」「まあ、どなたかしら」「男の方です」「親戚の人ですか、学校の時の人かしら」「お名前が、全然違うけれど、似ています」「名前ですか、あたくしが、よく存じている方でしょうか」「会った事はありません」

「では、今日のゲストの方に登場していただきましょう。お名前をどうぞ」「○○から来ました『白柳徹夫』と申します。いつも、テレビを拝見しております」「まあ、さようでございますか。こうしてお会いしてみると、はじめてお会いしたとは思えませんでございますね。これからも、お元気で。収録スタジオは笑いの渦でした。芥川也寸志さんも笑っていました。楽しかったです。覚えていきます」。

二つ目は、ゲストにギターを抱えた声帯摸写の江戸家子猫さんが出演した回です。ギターの名曲、タレガ作曲の「アルハンブラ宮殿の思い出（アルハンブラの思い出）」を弾いたのです。ト

レモロの演奏がすばらしかったので覚えています。芥川さんも黒柳さんも絶賛でした。私はテレビに向かって拍手、拍手でした。

子猫さんは本名を岡田八郎といい、中学校の時の先輩です。服装委員会を一緒にしました。神経質そうに笑う所は、今テレビに出ている顔と変わりありません。最初の頃は、親子で出ていました。父親の江戸家猫八さんが言いました。「俺は、もうこいつに負けている。なんしろ若くてハンサムだからねえ」と。声帯模写も人を引き付ける話術も、うまくなっていききました。

その後、父親の三代目・江戸家猫八さんが亡くなり、子猫さんは四代目・江戸家猫八を襲名、活躍されましたが、平成二十八年三月二十一日に亡くなりました。享年六十六。遠く、近く、ウグイスが鳴いています。ウグイスの鳴きまねは、猫八さん子猫さん親子の十八番でした。

田部井淳子さん

平成二十八年十月二十日、世界最高峰エベレストの登頂に女性として世界で初めて成功した登山家の田部井淳子さんが腹膜癌で亡くなったという報道に衝撃を受けた。七十七歳だった。トレーニングを積み、女性で世界初の七大陸最高峰登頂も果たしている。

田部井さんが話された事を覚えている。「私は顔がまずいので、ひきこもりで人前に出られなかった。でも登山をするようになって自信がついて人と積極的に交流するようになったんですよ。人と関わる事は楽しい。登山で人生がかわりました」と。

福島県三春町生まれの田部井淳子さんは、東日本大震災後は、避難生活を送る人々を招いたハイキングを企画したり、東北の高校生と富士山頂を目指したりする活動に力を入れた。田部井さんは、みんなに囲まれ、いつも笑顔だった。

「息子と一緒に初めて登山をした時の事です。息子は張り切ってズンズン登ろうとして、すぐバテてしまいました。登山をする時は、右足を一步出したら次に左足を一步出すのです。一步一步進めばいい、登山を楽しんでください」と。

この二つの話は、私の心の支えになっている。本当に困った時、一步ずつ進んで行くようにしている。童謡の会で話すと、「良い話を聞きました。ありがとうございました」と言って帰って行く人がいた。私の話をわかってくれる人もいる。

田部井さんは、平成十九年、胸のところの汗を脱脂綿で拭いていたら、シコリを自分で発見した。乳癌だった。さらに平成二十四年には、癌性腹膜炎と診断され抗癌剤治療をしていた。

今日は、おだやかな一日でした。秋の空には羊雲、紅葉の山々、赤い木の実が宝石のようです。もうすぐ野菊が咲きます。まだまだ登山を楽しみたかったです。一度も会った事のない人ですが、人の死は悲しい。みんな順になくなってしまいます。

小錦八十吉さん

元大関小錦さんは、歌がうまい。現在は、Eテレ朝六時三十五分から放送される子ども向け教

育番組』にほんごであそぼ』に「コニちゃん」の名で出演している。「ちよちよのちよい暗記」では相撲の決まり手を披露する、頼もしい。歌も歌う、いい声だ。「コニちゃん」は微笑ましい姿で子どもたちからの人気も高い。

ハワイのオアフ島西岸部のナナクリという町で、十人兄弟の九番目の子どもとして生まれ育った。比較的貧しい地域で、近所のグループ同士の喧嘩が絶えなかった。小学生の頃から、地元で盛んだったボクシングやアメリカンフットボールをやり、毎週日曜日は教会の聖歌隊で歌った。学校の授業ではハワイの伝統音楽やポリネシアンダンスも学んだ。音楽ライブなど現在の活動は、小さい頃から音楽に親しんできたことが理由の一つかもしれない。

勉強は算数が得意で、小学校の学内コンテストで二位になったことがある。高校一年生の時、地元の高校からホノルルのハワイ大学附属高校に転校した。米領サモアから転住して苦労した両親は、子どもに良い教育を受けさせたかった。アメフトチームは、リーグの優勝決定戦まで進んだ。また、学校のジャズバンドのフェスティバルで米国本土にも行った。卒業後は法律の勉強もしたいと思っていた。

生まれ育ったナナクリでは、貧しい環境の中で助け合いの風土がよかったけれど、みんなが似た環境で育ち、競争意識がなく、勉強やスポーツでやる気を高めるのは難しかった。

転校したハワイ大学附属高校には、家庭が裕福で、弁護士や医師を目指すような頭の良い生徒もいた。家庭環境などが全く違う生徒から刺激を受けた。広い世界に目を向けるきっかけになった。「高校時代の経験と、通わせてくれた両親に感謝しています」と言う。

◆小錦さんは、ハワイ出身の元関脇・高見山にスカウトされた。昭和五十七年に初土俵、昭和六十二年に初の外国人大関に昇進。平成九年に引退。

綾戸智恵さん

綾戸智恵さんは、ジャズシンガー。私はテレビでピアノ演奏を聴くたびに、「この人は天才だ」と思う。

「まいどォー」「何かやろうとするなら、すぐやるんや、人間は『なまもの』だから腐るでエ。明日、明後日はないんや!」。

関西弁でまくしたてるそのしゃべりは「えげつない」が、堂々と自信に満ちている。恥じるところがない。

「六十歳になった。ここからや、『私を見なさい』と言う人でありたい」。平然と言った。たくさんさんの苦勞をしてきたので、もう怖い物がない。

◆「えげつない」が、三省堂国語辞典に掲載されていたので驚いた。「関西などで」①ろこつな言い方をして、いやらしい。②こまかな心づかいがたりない。

桂文枝さん

平成三十年六月十日、朝五時三十分からNHKテレビ『演芸』を観る。桂文枝の創作落語「赤とんぼ」をやっていた。

三番の「♪十五で、姐やは、嫁にゆき、」をとりあげて、「今は、十五で嫁には行きませんなあ、行つたら犯罪でっせ。法律で決められている」。客席から笑いが来た。

そのあとで、「今の世の中が乱れているのは、子どもたちが童謡を歌わないからです」と言った。客は「なるほど」と思い、話に引き込まれて行く。

続いて童謡や唱歌の最初の部分を延々と歌い続けた。

「♪はーるよこい はーやくこい」「♪うーのはなーのにおうかきねに」「♪しーずかーなーしーずかな」「♪さーぎーりーきゆる みーなとえの」「♪はーるがきた はーるがきた」「♪わーれはうみのこ しーらなみの」「♪だれかさんがだれかさんが だれかさんが みーつけた ちいさいあきちいさいあき ちいさいあき みーつけた」(客席から笑いが来た。「みーつけた」の歌い方が受けた。)

「♪ゆーきやこんこ あられやこんこ」……

「いつまでやってんねん」「時間が来るまでや」幕。

声がいいとか、歌がうまいとかではなく、聞いていて自然で、客を引き込む歌い方だった。春夏秋冬の歌、よくこれだけの数を覚えたか。名人芸に感動だった。

桂三枝(かつらさんし)から六代目・桂文枝(かつらぶんし)になった時、「新聞紙しんぶんしじゃあおまへんで、(ぶんし)でっせ」と挨拶した。私は、いつぺんで覚えた。自作については、後世に語り継がれ

ることを前提としているため、「新作落語」（古典落語の対語）とは呼ばせず、敢えて「創作落語」と呼ぶ。

◆「赤トンボ」は、桂三枝の時に作った。『童謡や唱歌には、春には春の歌があり、夏には夏の歌がある。いい歌があるなあ。春夏秋冬、四季それぞれに美しい』。「♪春は名のみ風の寒さや」「♪夏がくれば思い出す」「♪しずかな しずかな 里の秋」「♪雪やこんこ霰やこんこ」「♪春の小川は、さらさら行くよ」「♪うの花のおう垣根に」「♪秋の夕日に照る山紅葉」「♪木枯らしとだえて」「♪春よ来い はやく来い」「♪うみは ひろいな おおきいな」「♪あれ、松虫が鳴いている」「♪もーいくつ ねると、お正月」「♪春のうららの隅田川」……「（部長）どこまでやるんですか」。（童謡酒場「赤トンボ」にて）歌の部分は、話すたびに進化している。

かこさとしさん

平成三十年六月四日、十時二十五分からNHKテレビ『プロフェッショナル 絵本作家かこさとし』を観る。

加古里子（かこさとし）さんは、『だるまちゃんとてんぐちゃん』『からすのパンやさん』など六百点以上の絵本を描いた。また、シリーズ『かこさとし 大自然のふしぎえほん』をはじめ、自然科学の専門知識を基に、楽しみながら科学に親しめる子ども向け科学絵本も多く手がけた。

『かわ』『宇宙』など。

現在九十二歳、「お尻が痛い」と言い続けていた。これは職業病。長年座り続けて絵を描いていたからです。たくさんの絵本を作ったのに、助手の人が一人もいないのに驚いた。文も絵も全て自分でおこなう。細かい作業だ。

収録中、大変な事が起きた。『水の話』を編集者と一緒に出版の方向で検討した。編集者が手伝ってくれる人を紹介した。手伝ってくれる男性が描いた「水玉坊や」は、気に入らなかった。自分の絵の中に他人の絵が入った事が気に入らなかった。「ダメだね」。結局、長年温めていた『水の話』は出版しないことになった。企画から時間が経ち過ぎていた。家族にも編集者にも接する時は、いたって優しいが、作品の話になると頑固で厳しい。

『たるまちゃんとおとひめさま』の出版に期待したい。こちらは、ほぼ完成していた。玉手箱をキラキラな物に修正していた。絵を描いている時は楽しそう。そのかたわらには常に長女がいて、話し相手になっていた。献身的な見守りが印象に残りました。なかなかできることではありません。あたたかな家族愛から、おおらかなユーモラスな作品が生まれた。幅広い層に愛され続ける理由でしょう。

かこさんは、航空士官を目指していたけれど、近視のため戦争に行くことができず生き延びた。仲間は命を落とした。だから子どもたち之間違った選択をしてほしくないという思いがあり、子どもに何を伝えるべきか真剣に考えた。

かこさんの頑張りには、想像を絶する。他を寄せ付けけないものがある。緑内障で視野が狭くなっても、最後まで描き続けた。

◆「かこさとし」さんは、福井県生まれ。東京大学工学部応用化学科を卒業後、化学会社研究所に勤めながら、紙芝居や幻灯などの作品を制作。『だるまちゃん』シリーズは累計約三百九十万部、『からのパンやさん』は二百四十万部以上を発行している。平成三十年五月二日、藤沢市の自宅で亡くなった。享年九十二。

早川殿

小田原城に登った。昔あつた家系図は、今は展示していなかった。天守閣から相模湾、双子山、小田原駅を見る。足がすくんで歩けない。私は高い所が苦手です。

受付で「早川殿と北條の関係を教えてください」と言った。学芸員が即答で「北條氏第三代目当主・北條氏康の娘です」「なるほど」。小田原の早川一帯は、北條氏康の領地だった。今でも小田原市早川という地名はある。

早川殿は、生年不詳。相模国の戦国大名・北條氏康の長女。甲斐の武田信玄・相模の北條氏康・駿河の今川義元のあいだで、甲相駿三国同盟（こう そう すん さんごくどうめい）が結ばれ、その証として早川殿が、駿河国の今川氏真の正室として駿府（駿河国府中の略）に赴いた。

北條五代は、初代「早雲」、二代「氏綱」、三代「氏康」、四代「氏政」、五代「氏直」。北條氏は、明応四年（一四九五年）、北條早雲が小田原城を奪取し、その後百年にわたって栄華を極めたが、天正十八年（一五九〇年）、豊臣秀吉の小田原攻めによって滅亡した。「みつうろこ（三角が三つ）」

の旗印は、どこの殿様の軍旗ぐんきより気に入っている。

源頼朝からいただいた名前

私が主宰する『童謡を歌う会真鶴』では、圧倒的に「青木(あおき)」という名前が多い。みんなが「青木様」です。平成二十九年六月二十九日、NHKテレビの人名探究バラエティー『日本人のおなまえっ!』で、真鶴には「青木」という名前が多い。それはなぜか? を放送した。貴船神社の宮司さんによると、「頼朝を岩窟にかくまった時、近郊の人が「アオキ」を取って来て入口が見えないように隠した。それで頼朝から「青木」の名前をいただいたと伝えられている」との話でした。

テレビ番組のリポーターが岩窟を見て、「狭いですね。ここに七人も隠れていたのですか?」と訊いた。私も、「目の前の真鶴港から舟が出せるのに、なぜ岩海岸まで行って舟に乗ったのか?」が疑問です。湯河原にも同じ伝説がある。

平成三十年三月十五日、『日本人のおなまえっ!』で再び「源頼朝からいただいた名前」を放送した。「青木」の他に、敵が来ないか見張りをした人には、よく守ってくれたということで「御守(おんもり)」の名前を、五目御飯を作って食べさせてくれた人には、五つの味がしたということで「五味(ごみ)」を、頼朝からいただいたそうです。

◆『吾妻鏡』源頼朝伝説によると、治承四年(一一八〇年)八月二十三日、源氏再興げんじさいこうのため立

ち上がった源頼朝が率いる伊豆・相模の兵三百は、平家方の大庭景親（おおばかげちか）の兵三千と相模国の石橋山（現・小田原市）で戦うが、圧倒的多数の大庭軍に敗れ、総崩れとなった（石橋山の合戦）。

◆「鴉窟（しとどのいわや）」八月二十八日、生き延びた源頼朝は、土肥次郎実平（どひのじろうさねひら）、実平の嫡男・土肥遠平（どひのとおひら）、実平の弟・土屋三郎宗遠（つちやのさぶろうむねとお）、岡崎四郎義実（おかざきしろうよしざね）、安達藤九郎盛長（あだちのとうくろうもりなが）、新開次郎忠氏（しんかいのじろうただうじ）に守られて、命からがら真鶴の「鴉窟」に身をひそめる。この折、窟の内から鴉（しとど）という鳥が舞い出たと伝えられる。かつては高さ二メートル、深さ十メートル以上の大きさがあり、波が打ち寄せる天然の岩窟（岩穴）でした。

鈴木森七五三先生

中学校の数学の先生の名前は、「鈴木森七五三」といった。私はこの先生からマイナスの数を教えてもらった。「1」より小さい数。マイナスイ、マイナス2、マイナス3、マイナス4、マイナス5、マイナス6……数学が楽しくて、大好きになった。計算問題には7、5、3の組み合わせが多く出題された。計算尺も教えてもらった。

ある日、突然別れが来た。「家庭の事情で学校をやめることになりました」と朝会でクールに挨拶され、ほっそりと背の高いメガネをかけた神経質そうな先生はいなくなつた。私も中学校を

卒業した。

今日、NHKテレビ『日本人のおなまえっ!』で、「さて、『七五三』これは何と読むでしょうか?」という問題が出た。ゲストが「クイズ番組のようだねえ」と言い、だれもわからなかった。私は「これは簡単、(しめ)だよ」と思った。「正解」。

数学の先生の名前だ。先生の名前は、『すずき もりしめ』といった。番組の説明では、「七・五・三」は(しめ)と読む、しめ縄なはの(しめ)。昔は、一本の縄に白い紙で細長く切って作った「しめ飾り(しで)」を七本・五本・三本束ねて吊るしたのだそうです。神社などで見かけるあれです。すると、数学の先生の家は神社だったのだろうか。宮司さんの父親が亡くなり、後を継がれたのでしょうか。「宮の杜(森)」に「しめ縄の(七五三)」||「鈴木森七五三」様。ありそうです。家は関西方面だと聞いています。お元気ででしょうか。

渥美清さん

笑いと涙の映画『男はつらいよ』は、第一作が一番よくできている。「寅さん」を演じた渥美清さんは、俳号「風天」として、句会にも参加していた。その俳句がすばらしい。

池田小百合選 『渥美清のうた「風天（フーテン）」より』

- ・花びらの出て又入るや鯉の口
- ・あと少しなのに本閉じる花冷え
- ・さくら幸せにナツテオクレヨ寅次郎
- ・蝶々や空のリボンとなりにけり
- ・月ふんで三番目まで歌う帰り道
- ・ひばり突き刺さるように麦のなか
- ・背のびして大声あげて虹を呼ぶ
- ・赤とんぼじつとしたまま明日どうする
- ・コスモスひよろりふたおやもういない
- ・霜ふんでマスクの中で唄うたう

『男はつらいよ』（主演：渥美清）第三十九作「寅次郎物語」で、勉強と恋に悩む甥の満男（演：吉岡秀隆）が寅さんに尋ねる。「人間は何のために生きているのかな」。寅さんは「難しい事を聞くなあ、おまえは」と一瞬戸惑うが、「生まれて来て良かった、そう思うことが何べんかあるだろう。そのために生きてんじやあねえのか」。

私は、「生まれて来て良かったと思うことは一度もない」と考えてから、突然、台所にいる夫にむかって「私と結婚してくれてありがとう」と言ってみた。すると夫は「僕も感謝しています」と言った。それは遺言のようだった。